エクリチュールの臨界へ

―井伏鱒二『黒い雨』

滝口明祥

学習院大学文学部研究年報　第58輯　抜刷　（平成二三年度）
Off-printed from The Annual Collection of Essays and Studies,
Faculty of Letters, Gakushuin University, Vol. LⅧ (2011)

エクリチュールの臨界へ
――井伏鱒二『黒い雨』

滝口明祥

一、

『黒い雨』（新潮社、一九六六・一〇）は井伏鱒二の代表作であるとともに、数多い井伏作品の中でも特に毀誉褒貶の激しい作品であると言っていいだろう。「新潮」誌上で「姪の結婚」という題名で連載が開始され、途中から「黒い雨」と改題されたこの作品は、連載完結直後から称賛の声が相次いだ。たとえば、「私はもともと原爆小説というものが好きではない。それどころか原爆のことを書いたり話したりするのもはばかりたいような気持である」という江藤淳「文芸時評」（「朝日新聞」一九六六・八・二六）は、『黒い雨』について「原爆をどんなイデオロギーにも曇らされぬ眼で、これほど直視し切った小説を私ははじめて読んだ」と絶賛する。

「黒い雨」の動かしがたい説得力の秘密は、二十一年前の広島におこった異常時を語るにあたって、作者が見事にこの平常心を貫き通しているところにある。

主人公が戦時中は勤めに出ていた小地主と覚しい人物で孤独なインテリではなく、いつも家族や職場や村での具体的な人間関係のなかで、生活の責任を負わされて行動していることも共感をたかめる要素であろう。いわば作者がこの小説の範囲を、地方の生活に深く根ざした控え目な生活者の視野に局限しているために、

そこに映じた原爆被災という事件は無限に重みと深みを加えるのである。

また山本健吉「文芸時評（上）」（「読売新聞」一九六六・八・二九）は「これは原爆投下後の、広島とその周辺地帯の記録的小説である。事件後二十一年目に、こういう小説が書かれたことは意味が深い」と述べる。

終戦後四、五年は、いわゆる原爆小説が、ずいぶん書かれた。だが、いつかその記録としての悲惨さに、読者はそっぽを向けはじめ、原爆小説は読まれなくなった。〔…〕それほど読者に忌避されてきたことは事実だが、その責が、読者の忘れっぽさや、ジャーナリズムの軽薄さに帰すべきものであるかどうか、疑わしい。原水爆反対の平和大会は、毎年八月に広島で行われているが、これほど国民の大多数の無関心という以上の、嫌悪感（けんおかん）をかき立てながら、一人よがりで挙行される行事も珍しい。責は国民にあるのではなく、その所属する政党の利害や主義主張を押し立てて、主催し参加する、いわゆる「平和主義者」の独善にある。

このように原爆の語られ方に不満を述べる山本は『黒い雨』が「原爆を描いて、しかもあらゆる政治的信念から自由であり、そのことが、しばしば書き古されたことを書きながら、しかも新たな感じをいだかせる」点を高く評価する。平野謙「九月の小説（上）」（「毎日新聞」一九六六・八・三一）もまた、「この題材をイデオロギーぬきに書いている」点に注目し、「原水協と原水禁と核禁会議という三つの団体に運動が分裂し、ことしの世界大会にはまた脱退さわぎまで起こったというような政治的イデオロギー的な現状に対して「黒い雨」は大きな無言の警告を発している」と指摘する。つまり、江藤、山本、平野という当時の有力な文芸評論家三氏が揃って『黒い雨』におけるイデオロギー性のなさを称揚するのだ。その他の論者の場合にも同様であり、その際には「記録文学」[1]や「風俗小説」[2]としての側面が注目されるなどした。野間文芸賞を受賞した際には、選考委員はそれぞれ「井伏鱒二氏の「黒い雨」は本年度文壇第一の収穫で、これが受賞作となったのは当然なことだと思います」（井上靖）、「「黒い雨」は戦後現われた最も優れた

作品かもしれない」（大岡昇平）、「原爆投下といふ異常な事件を小説にすることのむづかしさはこれまでのいはゆる原爆小説が示してゐるが、井伏氏はこの難事業と正面からとりくみ、はじめて成功してゐます」（中村光夫）などと絶賛している（「昭和四十一年度第十九回野間文芸賞」、「群像」一九六七・一）。その背景には、もちろん原水禁運動の硬直した政治主義と党派性への嫌悪感が存在していたのであって、川口隆行が指摘するように、『黒い雨』は「党派性を越えた国民の共通体験を表象した文学として受容」[3]されたと言っていいだろう。

だが一方で、こうした評価のされ方にはたびたび疑義が呈されてきた。たとえば、古林尚「井伏鱒二の『黒い雨』」（「文学的立場」一九六七・二、四、一〇）は「彼のまわりの称賛者たちは、故意に井伏鱒二の作家的冒険に目をつぶり、井伏が作品の完成を断念することによってかろうじて手につかんだ成果をも、寄ってたかって、わいわいと叩きつぶそうとたくらんでいる。「姪の結婚」から「黒い雨」への転身が必ずしもすんなりとは行われなかった間隙につけこんで、日常的な「姪の結婚」を賞めそやす形で政治的な「黒い雨」を足蹴にしている」と憤る。また、大江健三郎『持続する志』（文藝春秋、一九六八・一〇）は江藤淳の「平常心」を「傍観者の平常心」と呼び、『黒い雨』における井伏鱒二の想像力は、激しく緊張しているが、それは傍観者の平常心とまさに逆のものによって緊張している。それは、おなじく平常心という言葉を用いるなら、原爆を現実に自分の頭上にうけた被害者の、しかもなお最悪の日常を生きのびようとする人間の平常心によって緊張している」と江藤のような評価から『黒い雨』を救い出そうとする。長岡弘芳は「「黒い雨」がもたらしたまぎれもない感銘は、語り尽くそうとしてもなお語りつくせぬ事実の巨大な深淵――したがって今後ともそれは繰り返し語られる必要があることを改めて認識させ、同時にあえてその事実に挑んだ作家的個性の誠実さによる達成でもあった」と作品自体は高く評価しつつも、「しかしその出現を〈戦後二十年、ようやく生れた国民文学〉（朝日新聞読書欄、昭四一・一一・八）だとするような評価の仕方が、だが大田〔洋子〕や峠〔三吉〕の

遺産を結果として貶しめ、あるいは井上光晴やいいだ・ももらの成果を、結果として片手落ちにするような言い方で言われてはならぬと、私は強く思う[4]」とやはりその評価のされ方には強く抗議の意を表明するのである。

もちろん『黒い雨』という作品自体に対する疑問もしばしば出されてきた。それは『黒い雨』における、原爆という出来事に対する独特の距離感に由来するものだ。森川達也「時評（文芸）記録と小説について」（「図書新聞」一九六六・一〇・一）は「『黒い雨』一篇は、作品としては記録の厳しさにも、虚構の厳しさにも徹しえない、あやふやなものとなったという他ない」と批判しているし、北村美憲「井伏鱒二『黒い雨』論」（「新日本文学」一九六六・一二）は「井伏に対する賛嘆の気持と同時に、わたしの最大の不満もまた、その磨きこまれた言葉の、度を過ぎた奥床しさにあ」るとし、次のように述べる。

> これは、おそらく、井伏流ドキュメンタリズムの本質にかかわっている。かれは「記録・資料」と、まるで時間に制限のない碁を打つようにゆっくりと向い合い、充分に咀嚼したのち、自分の胃袋のなかで記録・資料に新しいうたを歌わせる。ドキュメントの荒々しくとげとげしいところは、すでに、すべて、磨きこまれて無害なのだ。

『黒い雨』を「緻密な名作」と称賛する開高健でさえ、「透明で気品がありすぎるのが欠陥で、ときに、広島の惨禍は、もっと無鍛錬、無教養の誰かが一途の執念で下手くそに書いたほうがいいのではあるまいかと思わせられさえする[5]」と述べているのであり、このような不満を抱いたものは決して少なくなかったと思われる。これは非体験者が原爆という出来事を作品化する困難に関わってくる問題でもあろう。被爆者である豊田清史が『黒い雨』の主要な部分は『重松日記[6]』をほぼそのままの形で使ったものに過ぎないと主張し、執拗に『黒い雨』批判を繰り返しているのも、そうした側面から考えていく必要があるはずだ[7]。豊田の主張、証言には数々の虚偽が含まれていることが近年では明らかに

なっているが[8]、「全文の9割以上が引用[9]」などというあからさまなデタラメを弄してまで『黒い雨』を貶めることに豊田を駆り立てているものを軽視してよいとは思わない[10]。

だが、そうした批判を考えてみる前に、まずは『黒い雨』という作品をきちんと読むという作業が必要なのではないだろうか。『黒い雨』とその元になった『重松日記』とが全く違う性質を持ったものだということは両者を読み比べれば明らかなことであり、『黒い雨』では重松以外のさまざまな人々の日記や手記なども縦横無尽に利用され、しかも緊密に結びあわされている。『黒い雨』のそうした構造をきちんと作品に即して論じるという当たり前のことが疎かにされたまま、称賛や批判の言葉を連ねても虚しいだけではないだろうか。膨大な先行研究に目を通していると、日高昭二の「「黒い雨」というテクストが、意外に読まれていないという印象を禁じ得ない[11]」という言葉に同意したくもなるのだが、しかし極めて少数であるとは言え、着実な読みを行っている先行研究も確実に存在することは明言しておかなければならない。

たとえば、長谷川三千子は「実はこの小説では、「書く」といふことそれ自体が、隠されたテーマをなしてゐて、思ひもかけない重要なはたらきをすることになるのである[12]」と重要な指摘をしている。また、榊敦子は『黒い雨』に挿入されている「多数の二次的（そして三次的）な物語」が「最初の筆者、読者、筆記者、改稿者、次の読者など、さまざまな役割を担う人々の手を経」ることによって「それぞれのコンテキストに即した意味を与えられ、変形されてゆく[13]」様相を丹念に読みとっている。なぜかこの二本の先行研究は、その後の研究において全く言及されることがないのだが、『黒い雨』について論じるのにこの二本の論考を逸するわけにはいかないと思われる。本稿においても、長谷川や榊の指摘を参考にしながら、『黒い雨』という作品の構造を読み解いていくこととしたい。そうすることによって、この作品が「原爆という出来事をいかに表象するか」という困難な問いに対峙していることが明らかになるはず

だ。さまざまな批判が問題とする原爆という出来事に対する独特な距離感も実はそこに起因していると思われるのだが、まずは『黒い雨』が『重松日記』をどのように利用しているかを確認しておこう。

二、

閑間重松は、姪の矢須子が〈原爆病患者〉だという噂を否定するために矢須子の当時の日記を清書し、縁談の相手に渡そうと考える。噂では矢須子は広島市中心部にいたことになっているが、実際には〈爆心地から十キロ以上も離れたところ〉にいたのだ。だが矢須子の日記の中で黒い雨に遭った場面をそのまま書くかどうかに悩み、重松は自分の日記も清書して矢須子の日記の附録編として矢須子の縁談相手に渡すことにするのである。〈そんなことしたら、また仕事が殖えるでしょうが〉と妻のシゲ子に言われた重松は言う。〈殖えてもよいわい。仕事を枝葉から枝葉へ殖やすのは、わしの生れつきの性分じゃ。この被爆日記は、図書室へ納めるわしのヒストリーじゃ〉（二）。

『黒い雨』はまず何よりも日記を「書くこと」をめぐって進行する物語である。そこでは日記の内容、すなわち一九四五年八月の出来事とともに、日記を書いている現在が重要になってくる。ここで重松が自身の日記を清書するのは、姪の矢須子の縁談を円滑に進めるためというのが第一の理由なのだが、とともに〈わしのヒストリー〉を残すためのものというのが第二の理由として挙げられているのである。

日記を書いている現在において、重松たち〈原爆病患者〉に向けられる周囲の視線が決して温かくはなかったことは、作品の序盤で明示されている。農繁期に、重松が同じく被爆者の庄吉さんと釣りをしていると、池本屋の小母はんが〈お二人とも、釣りですかいな。この忙しいのに、結構な御身分ですなあ〉と二人に声をかけてきた。その言いぐさに、日ごろは温厚篤実な庄吉さんも怒りを抑えることができない。

「なあ小母はん、わしらは原爆病患者だによって、医者の勧めもあって鮒を釣っておる。結構な御身分とは、わしらが病人だによって、結構な身分じゃと思うのか。わしは仕事がしたい、なんぼでも仕事がしたい。しかしなあ、小母はん、わしらは、きつい仕事をするとこの五体が自然に腐るんじゃ。怖しい病気が出て来るんじゃ。」

「あら、そうな。それでもな、あんたの云いかたは、ピカドンにやられたのを、売りものにしておるようなのと違わんのやないか。」

「何だこら、何をぬかす。馬鹿も、休み休み云え。わしが広島から逃げ戻ったおり、あのとき小母はんは、わしの見舞に来たのを忘れたか。わしのことを尊い犠牲者じゃと云うて、嘘泣きかどうかしらんが、小母はんは涙をこぼしたのを忘れたか。」

庄吉さんの怒りは池本屋の小母はんが去っても治まらず、〈もう池本屋も、広島や長崎が原爆されたことを忘れとる。みんなが忘れとる。あのときの焦熱地獄――あれを忘れて、何がこのごろ、あの原爆記念の大会じゃ。あのお祭騒ぎが、わしゃあ情けない〉（二）と言うのだ。重松が自身の「被爆日記」を清書することを決めた背景に、このような周囲の視線があったことは容易に理解できるだろう。

その「被爆日記」の記述に『重松日記』が利用されているわけだが、『黒い雨』と対応する場面を抜き出して比較してみよう。八月六日、原爆投下から少し経ったあとの場面である。

横川小学校の校庭の一隅に、防火用水タンクを見つけた。眼鏡をはずして、顔を洗おうとすると、眼鏡がない。帽子もないことに気がついた。

「眼鏡と帽子をおとした」と云うと、高橋夫人は腰や肩を撫でて、「カバンを落しました。あの中には三千

円あまりのお金と、預金通帳、印鑑等を入れて居りました」と云う。洗面して探しに行こうと、二人は洗面した。

同じ場面が、『黒い雨』では次のように変えられている。

僕らは横川小学校のわきを通るとき、校庭の隅に防火用水のタンクがあるのを見た。それを先に見つけた高橋夫人は駆けだして行った。僕も駆けだそうとしたが、駆けると頬の筋肉が揺れて左の頬が気になるので、「落着いて、落着いて」と思いながら歩いて行った。ところが、顔を洗うつもりで眼鏡をはずそうとすると眼鏡がない。帽子もないことに気がついた。

「眼鏡と帽子を落した。」

と僕が云うと、夫人は腰や肩を撫でまわし、

「鞄を落しました、わたくし」と、ひそひそ声で云った。「あの鞄には、三千円あまり入っております。お金と、預金通帳と、印鑑を入れてあります。」

「じゃ、探しに行こう。光の玉が光った横川駅に落したんだろう。三千円とは、えらい大金だ。」

とにかく顔を洗ってということにして、そこにあったバケツで二人はお互に相手の頭の髪に水をかけ合った。

「閑間さん、顔をこすっちゃいけませんよ。」

夫人に注意されるまでもなく、手はいっさい使わないで、僕は顔をバケツの水に突込んで左右に振りつづける仕方で洗った。バケツの水をいっぱいにして、息を思いきり吸いこんで顔をバケツのなかに漬け、少しずつ空気を吐きだしながら頭を振ると、噴き出る泡が気持よく頬を撫でた。

『重松日記』にある簡素な記述に大筋では従いつつも、細部が加えられることによって膨らみのある場面に変えられていることが分かるだろう。これに続けて、『重松日記』にはない次のような記述が付け加えられている。

水を飲みたくてたまらなかったので、バケツの水を新しくして、三度含嗽してから飲んだ。僕は子供のとき誰から教わったともなく、よその土地で井戸水や清水を飲むときには、必ず三度含嗽してから飲むことにしていたからである。僕の子供のときの友達は、みんな三度含嗽してから飲むのだと云っていた。それは水あたりを防ぐためばかりでなく、井戸や清水の水神様に敬意を表するすべだと云われていた。(三)

ここでは、水を飲むという何気ない動作に付随して、重松の子供の頃の記憶が語られている。『黒い雨』においては、このように重松が子供の頃の記憶を想起する場面が時折はさまれるのだ。そしてそれは『重松日記』には見当たらないものである。

先行研究においてもしばしば指摘されるように[14]、『黒い雨』には日記に書かれた時間と、それを書く時間という二つの時間が描かれている。その二つの時間の対照が『黒い雨』という作品を形作っていると言ってよい。だが、『黒い雨』にはより長い尺度の時間も書き込まれているのであって、重松の子供のころの話の他にも、大河内さんの奥さんが関東大震災に遭った際のことが触れられるなどしているのである。また〈被爆日誌〉以外の部分では、明治六年に重松の曽祖父が東京の役人からインキで書かれた手紙をもらったというエピソードが出てくるなど、重松の出生以前にまで遡るような時間が描き込まれているのだ。しばしば触れられる村の年中行事もまた、重松が出生する遥か以前から続くものであり、数年単位の時間を相対化するような悠久とした時の流れを表象するものと言える。

そしてそれは、「変わるもの」と「変わらないもの」の存在を読者に意識させるだろう。原爆という未曽有の出来事によって何が変えられ、何が変えられなかったのか。この作品が示唆するのは、そのような問いに他ならない。

三、

『黒い雨』の中盤において、同じ被爆者である庄吉さんと浅次郎さんが重松を訪ね、三人共同で鯉の子を孵化させる池をつくる計画をもちかける。重松も賛成し、庄吉さんと浅次郎さんは孵化させる仕方を習うため常金村に〈留学〉することになる。〈原爆病患者とも思われないほど行動的であった〉二人の姿に動かされるように、重松も「被爆日記」の清書に没頭していくのだ（一六）。それ以降、日記を書く時間はだんだんと後景に退き、書かれた時間が作品を蔽いつくすようになる。構成の乱れという指摘がしばしばこの作品に向けられる所以だが、『黒い雨』のこうした構成は日記を清書するという作業に没頭していく重松の在り方を反映したものだということを理解する必要があるだろう。そして、それに従って、重松の書くという行為の意味も変質していっているのではないか。榊前掲書が適切に指摘するように、この作品においては「語る時間と語られる時間が交錯し、影響を及ぼしあっている」ことを見落とすべきではない。そうした作中のリズムに身を任せてみれば、大江健三郎の「長篇小説の構成において、『黒い雨』は理想的なモデルをなすといいうるほど、見事に作られている」[15]という言葉に同意するのも、さほど困難なことではないはずだ。

『重松日記』と『黒い雨』中にある重松の「被爆日記」とを比較してみれば、前者にはない無数のエピソードが後者に付け加えられていることが分かるだろう。しかも、それは重松が実際に体験したものばかりではなく、人から聞いた話という形でさまざまな人々の体験が書きこまれているのだ。もともと『重松日記』にあるエピソードでも、厚みが加えられることによって一つの小さな物語を形成することになる。『重松日記』から『黒い雨』へ至る過程で、一人の体験を記した日記は無数の小さな物語が犇めくポリフォニックな空間へと変貌する。

そのような志向は『黒い雨』が連載から単行本になる過程においてもはっきりと見受けられるだろう。単行本化す

る際には連載時の本文に大幅な加筆が行われているが、寺横武夫が言うように、そのほとんどが「全体の文脈とは相即しない、きわめて独立性の高い内容をもつことは瞭然」[19]である。〈仕事を枝葉から枝葉へ殖やすのは、わしの生れつきの性分じゃ〉という重松の言葉をまるで裏打ちするかのように、その「被爆日記」は無数の物語を繁茂させていく。『黒い雨』の中で、重松は妻のシゲ子に次のように言う。

「おい、今日はどっさり清書したで。ムクリコクリの雲で、避難者が西練兵場でごった返すところまで清書した。しかし、自分で見たことの千分の一も本当のことが書けとらん。文章というものは難しいもんじゃ。」

「それは、あんたの書く文章が、何とかイズムとかいうのになるからでしょうが。」

「イズムというのじゃないよ。わしのは描写の上から云うて、悪写実という文章じゃ。しかし、事実は事実じゃ。――おい、その鰌は泥をよく吐かせたんか。」

傍線部は単行本化する際に書き加えられたものだが、この重松の言葉を作者井伏の言葉と安易に混同してしまってはならないだろう。被爆者である重松とは違い、非体験者である井伏が〈悪写実〉によって原爆という出来事を書くことなど出来るはずがなかった。

これも榊前掲論文が指摘していることだが、重松の「被爆日記」は被爆当時に書かれたものではない。もともとの重松の日記は、矢須子の日記と同じく、時間がない時には簡素に、時間がある時にまとめて詳しく書くという〈緩急式〉で書かれていたはずだが、『黒い雨』に示される「被爆日記」はそのような形式では書かれていない。当時の日記をもとに、編集され書き直されたものだろう。さらにそれに〈後日記〉や〈筆者注〉、〈附記〉という異なる表記で、後になってわかったことが付け加えられている。つまり、重松の「被爆日記」は何度か書き直されているのであり、そのたびに内容も更新されていると考えられるのだ。幾つか見ておこう。

己斐町には与田さんの親戚がある。その家に寄って頬の火傷に菜種油塗布の治療を受けていると、与田さんの従弟が背中に大火傷をして転げこんで来た。天満町で被爆したそうだ。背中いちめん七面鳥のとさかみたいにでこぼこに爛れ、皮膚が油紙の一枚のようにめくれている。「痛かろうなあ」と与田さんが云うと、痛くはないが余り乾燥すると肉が引張ってぴりぴり刺戟すると云った。やはり手当は菜種油を塗る以外に方法がなかった。

金壺眼の男はそんな話をして、

「どういうものでしょうか、わたしも痛くありませんですな」と云った。

「わたしも、ちっとも痛くないですな」と僕は云った。

もし僕らの火傷が湯とか火焔などで受けた火傷なら、少くとも二日や三日は痛さで唸らずにはいられないほどだろう。ただ乾燥しすぎたとき刺戟を感じるだけである。この条件だけで全体を考えるのは無謀だが、僕や金壺眼の男などの例から考えると、焼けた皮膚の下の神経が強力な熱で麻痺したために痛みを感じないのではなかろうか。乗客たちのうち火傷で痛がっている者は、爆発熱以外の火事の火で傷ついた人ばかりのようであった。（被爆による火傷で激痛を感じた人もあったそうだ――後日記）（八）

重松はたまたま電車で隣り合わせた金壺眼の男と話しながら、被爆による火傷では痛みを感じないようだと思うのだが、〈後日記〉ではそうではない例があったということが記される。右に示された三人の例が〈全体〉に当てはまるものとは限らないことが明示されているのである。ちなみに、この部分に対応する『重松日記』の記述は次のようになっている。

顔の左半分を焼き、皮膚がくるりとはげてとれた。これだけの火傷をしたのに、痛さを少しも感じなかった。

普通の火や湯で受けた火傷なら、少なくとも二三日は、痛さでうんうん唸らずにはおられないほどの火傷に違いないと思う。〔…〕

古市町（安佐郡古市町）の駐在巡査が、背中全面を火傷して、うつ伏して休養していた。全面に皮膚が焼けて、赤黒色の肉が見えていたが、何かが触れぬ限り痛さはないが、余り乾燥すると、肉が引っ張りピリくして痛い。〔…〕

右の二例で全体を考えることは無謀だから、僕と巡査の場合を体験から考えてみると、焼けた皮膚の下の神経の先端が、瞬間の強力な熱で麻痺した為に、痛さを感じぬのだと思う。工場に避難して来た負傷者も、一様に火傷の痛さは訴えなかった。尤も、爆発熱以外の火災の火で傷ついた者は、強烈な痛さを感じたであろう。

既に『重松日記』にも「二例で全体を考えることは無謀」だという考えは示されてはいるものの、『黒い雨』の〈後日記〉にあたる部分はない。つまり、被爆による火傷でも痛みを感じる例があるということは示されていないのである。この部分に限らず、『黒い雨』においては、一つの事象をめぐって互いに食い違う複数の視点がしばしば示されていることは重要だろう。

車内の人たちの意見を綜合すると、閃光が煌めいた瞬間にドガンという音がしたという説と、ザアとかドワァッという音がしたという説に分けられる。僕としては、ドガンという音がしたとは云いかねる。ドワァッという音であった。

爆発地点は大体において丁字橋附近だろう。それを中心に、二キロ以内、またはそれ以上に近い圏内にいた人たちは、ドガンという音を聞かなかったようだと云っている。

四キロも五キロも離れたところにいた人たちも、一様にピカリの閃光を見て数秒後にドワァッという音を聞いたと云っている。風圧の音か爆発音ではなかったかと思う。この音と同時に、窓硝子が吹きとばされ、家がぐらりと揺れ動いたそうだ。（八）

原爆が投下された際に聞こえた音やその聞こえ方も、位置や距離によって変わってくる。誰にでもあてはまる原爆体験など、どこにもないのだ。その人が屋外にいたか室内にいたか、どのような場所でどのような姿勢でいたかによって無数の「現実」があったのであり、『黒い雨』において〈枝葉から枝葉へ〉と広がっていく重松の「被爆日記」は、そのような複数の「現実」の存在を繰り返し示唆していくのである。もちろんそこには、誤った噂や不確定な情報も多々含まれることになるだろう。

車内にはそこかしこに話し声が湧いていたが、麻シャツの男の話し声は僕の耳によく聞き取れた。この男は、被爆に際して広島市役所の防衛課が怠慢であったというような口をきいていた。防衛課の役人は被爆後に罹災状況を師団司令部に通告することも怠ったと云っていた。

（筆者注――しかし後日、昭和三十年八月六日発行の柴田重暉著「原爆の実相」には左の如く云ってある。すなわち「被爆当日の午後、野田防衛課長は、戦時中の諸計画に基いて、市役所を中心とする罹災状況を第五師団司令部に報告する必要を想起して伝令を発した。勿論、全市が罹災していることなどは夢想だにもしなかった時である。伝令はやがて帰って来た。然し、その報告は「司令部はありません」であった。〔…〕そこで初めてこの戦災が、尋常一様のものでないということを防衛課長も察知したというのである」と記されている。麻の紋付シャツの人は一知半解であったと思われる。尚、柴田さんは後日になって原爆症で亡くなられた。）（八）

ここでは、電車内で麻シャツの男が話した内容が〈筆者注〉という形で訂正されている。防衛課の役人は師団司令部に通告することを怠ったのではなく、司令部自体が既に原爆によって消失していたのだ。しかし、この麻シャツの男もことさら嘘をつこうとしていたわけではないだろう。この男もまた、このような噂を誰かから聞いてきたに違いない。何が事実かわからない中で、さまざまな噂が被災地を駆け巡っていたのだと思われる。

重松はまた別の日にも種々の〈情報に通じていた〉乗客と隣り合わせ、それらを書きとめている。〈くたくたの紺のモンペをはいた平凡な顔の男だが、こちらの聞くことは何かにつけてよく知っていた〉（十九）とされるのだが、これにも〈しかし、その情報はずいぶん間違っていた〉という〈後日記〉が附されることになるのだ。だが、そうした誤った噂や不確定な情報もまた、被災地における人々の「現実」を構成している大切な要素であるには違いない。『黒い雨』ではそれらをも取り込みつつ、〈後日記〉などの形で別の「現実」を示していく。言いかえれば、『黒い雨』は決して〈全体〉を描こうとはしないのである。広島の被害を俯瞰的に描いた記述はどこにもない。統計的な数字が示されることがあっても、それはあくまでもローカルな場所に限定されたものに過ぎない。描かれるのは決して〈全体〉を構成しない断片なのであり、ただ〈枝葉から枝葉へ〉どこまでも増殖していく断片の集合なのである。

しかも『黒い雨』を構成しているのは重松の「被爆日記」だけではない。矢須子の日記、シゲ子の「広島にて戦時下に於ける食生活」、「広島被爆軍医予備員・岩竹博の手記」など、重松以外の人が書いた記録がさまざまに織り込まれることで、一九四五年八月における広島の「現実」は更に複層化されているのだ。

重松の「被爆日記」は八月十日以降、構成までもが『重松日記』から大幅に異なって独自の展開を示していくこととなる。十二日には重松の幼馴染であるテイ子さんという『重松日記』には出てこない人物が登場する。そのテイ子さんの話の中に細川医院という病院が出てきて、重松も以前に入院したことがあるというエピソードが紹介されるの

だが、それが後に「岩竹博の手記」が出てくる伏線となっている。

重松は姪の矢須子が発病した後、〈痔の手術を受けたことのある湯田村の細川医院の院長先生に、今後の処置について伺いを立てるため、この日記を矢須子の病状表の代用として持って行った〉（十六）。〈この日記〉とはシゲ子がつけた「高丸矢須子病状日記」のことだが、その内容が読者に知らされるのは細川先生がその日記を読むことを承諾した後なのだ。いわば、読者は細川先生とともに「高丸矢須子病状日記」を読むことになるのである。そして、痔が専門だという細川先生になぜ重松が相談したのか、読者は「高丸矢須子病状日記」を最後まで読むと理由がわかる。何故なら、そこには細川先生が被爆した義弟を〈看護して見事丈夫にした〉（十六）という話を聞く場面が出てくるからだ。

「高丸矢須子病状日記」を読んだ細川先生は、重松に原爆症から見事に回復したという義弟の手記を送ってくる。それが「岩竹博の手記」なのである。〈重松はそれをシゲ子の枕元で読みながら「奇跡だな」と何度も云った。「矢須子さんに読ませなくっちゃ」とシゲ子も何度か云った〉（十七）と二人の反応が示された後で、手記の内容が引用されていく。ここでもやはり読者は重松やシゲ子に寄り添いながら「書かれたもの」を読んでいくことになるのだ。

榊前掲書が言うように「『黒い雨』という物語内部の読み手が、物語外部の読者を先導してゆく格好になっている」わけだが、そこでの読むという行為は、もはや「書かれたもの」を「書かれたもの」として読む在り方とは全く異なってしまっている。重度の原爆症から奇跡的な回復を果たした岩竹さんの記録は、もはや単なる過去の記録としてではなく、終戦後四年以上も経ってから原爆症を発症した矢須子を死なせないための希望をもたらすものとして読まれるのである。それは重松やシゲ子にとってだけでなく、読者にとっても同じことだろう。矢須子の発症が「被爆日記」の八月十二日の最後に加えられた〈後日記〉において唐突に示されたとき、読者もまた衝撃を受けたはずだ。重松は〈後日記〉で次のように書いている。〈はじめ僕は茶の間でそれを打ち明けられたとき、瞬間、茶の間そのものが消えて青

空に大きなクラゲ雲が出たのを見た。はっきりそれを見た〉（十五）。この個所について、長谷川前掲書は次のように説明している。

思へば、重松が「文章といふものは難しいもんぢや」と呟いたとき、彼が歎じたのは、現実といふものを、書くことによつて甦らせるのがいかに難しいか、といふことであつた。「熱い」と千遍くり返して書いたところで、読む者の肌は熱くもならなければ火傷にもならない、といふ事実であつた。しかし実は、一方ではその事実に守られながら、「被爆日記」は清書されてゐたのだとも言へる。もしも、書くといふこと、清書するといふことが、そこに書かれたことを本当に甦らせることであるとしたらば、重松もそのやうな恐ろしいことを敢へてしなかつたであらう。ところが、その恐ろしいことが起つてしまつた――「書かれたもの」と「現実」とを隔ててゐたはずの、自明の防壁が、いま完全にうち破られたのである。

この長谷川の指摘は、矢須子の発症が読者に与える衝撃の質を実に鋭く捉えている。そもそも重松が「被爆日記」を清書しだした当初の目的は、矢須子が〈原爆病患者〉ではないことを証明するためだった。読者もまた、矢須子は原爆症を発症することはないと油断しながら、重松の「被爆日記」を読み進めていたはずだ。原爆による惨状が記されるのは「書かれたもの」である「被爆日記」の中だけで、その外側では終戦後数年を経てすっかり平和になった日々が描かれる。それがずっと続くと思っていた読者は、だからこそ矢須子の発症に衝撃を受けるのである。『黒い雨』という作品の中で起きた、「書かれたもの」の「現実」への侵犯は、『黒い雨』の外側にいる読者にも影響を与えないではいられないだろう。重松やシゲ子が「書かれたもの」を「書かれたもの」としては読めなくなっているように、読者もまた『黒い雨』という作品を単なる小説や記録としては読めなくなっていくに違いない。

シゲ子は「岩竹博の手記」を、矢須子が入院している九一色病院の院長にも参考のために読んでもらい、その時の

状況を重松に報告する。

「この岩竹さんの手記、あたしの見ている前で院長さん読んだんよ。読みながら、院長さんの表情に微妙なものがあったんよ。」

「それで、治療法について、院長さん何か云ったか。それが大事なことだ。」

「読みながら、二度ほど参考になりますと云ったんよ。それから読んだ後で、実は自分も広島二部隊に軍医懲罰召集で入隊したと云ったんよ。岩竹さんの入隊したのと同じ日に、同じ部隊へ入隊したんですって。」

「でも、あの院長さん生きておるじゃないか。」

「入隊した日、体格検査で即日帰郷になったんですって。そのときにはカリエスで、石膏の繃帯を下腹に巻いておったんですって。運不運の二筋道は妙なものね。院長さんは顔をしかめて読みながら、一度ぐっと息を嚥みこんだんよ。」

「そりゃあ、生唾だって嚥みこむだろう。それとも、嗚咽の一歩手前のところであったかも知れんな。」（十九）

矢須子の治療の参考にしてもらおうとして起こしたシゲ子の行為は、九一色病院の院長の思わぬ反応を引き起こす。岩竹さんと同じ日、同じ部隊に入隊したという院長は、もし即日帰郷になっていなければ、岩竹さんと同じような状況に陥っていたに違いない。そしてその場合、岩竹さんのように奇跡的に回復できたという保証はないのだ。ここにもまた、「書かれたもの」を「書かれたもの」として読めない者がいる。

〈もう池本屋も、広島や長崎が原爆されたことを忘れとる。みんなが忘れとる。あのときの焦熱地獄――あれを忘れて、何がこのごろ、あの原爆記念の大会じゃ。あのお祭騒ぎが、わしゃあ情けない〉――『黒い雨』の序盤で庄吉さんはそのように憤っていたが、それは作品内の現在である一九五〇年頃よりも、『黒い雨』が発表された一九六〇年代

によりあてはまる事態であったろう。〈みんなが忘れとる〉出来事。それをただ単に「書かれたもの」として、過去の記録として読み捨てられるだけに終わらせないためにはどうすればよいか。そのような要請こそが『黒い雨』という作品の構造を規定していることを見落とすべきではない。

四、

長谷川前掲書はまた、「この小説には、戦後の小説には珍しい、或る際立つた特色がある。それは「敵」といふものの存在である」と指摘している。これは長谷川の政治的立場に関わらず重要な指摘だろう。何故なら、〈敵〉に関する記述は『重松日記』にはなく、『黒い雨』において付け加えられた見逃せない要素の一つであるからだ。

僕は開襟シャツの襟で眼鏡の玉を拭こうとしたが、ぷるぷる手が震えるのに気がついた。がくがくするほど震えるので、高橋夫人もそれに気がついたらしい。

「閑間さん、わたしが拭いてあげましょうか。」

「いや、よろしい。手が震える理由、自分でもわかっているんだ」と僕は、震える手で眼鏡の玉を拭きながら云った。「敵が、あまりにも睨みを利かしすぎるからだ。正体も知れぬ光で、僕の頬も左側を焦がした。眼鏡も左側を焦がしたからな。為体が知れぬ怖さだよ。これが即ち睨みだな。」

「でも、今日はもう空襲はないでしょう。」

「あそこに転がっている、あの弁当を敵が見てくれないかなあ。あの握飯を見たら、敵はもう空襲に来なくてもいいと思うだろう。もうこれ以上の無駄ごと、止めにしてくれんかな。僕らの気持、わかってくれんかなあ。」

「閑間さん、めったなこと云っちゃいけません。」（三）

「被爆日記」の八月六日にある記述だが、『重松日記』にあるのは〈今日はもう空襲はないでしょう〉に対応する部分だけである。長谷川が言うように、〈僕らの気持〉を〈わかってくれ〉ないのが〈敵〉であり、だからこそ〈為体が知れぬ怖さ〉を持っているのが〈敵〉なのだ。だが、それとともに、ここでは〈敵〉の〈睨み〉を重松たちが受けるようになった理由も示唆されている。重松たちを〈敵〉に敵対させるように仕向けているものがあるのであり、だからこそ高橋夫人は重松に〈めったなこと云っちゃいけません〉と注意するのだ。『黒い雨』には、このように発言が遮られたり、最後まで行われなかったりする場面が繰り返し示されている。

たとえば、電車の中で麻シャツの男は、〈軍人対民間人の感情の縮図〉だというエピソードを披露するが、〈女に肘で小衝かれて喋るのを止〉（八）す。或いは、八月十四日に皆で〈明日の重大放送〉についてあれこれ推測をするが、〈話はもう言論統制に逸脱するところまで行ったので、それ以上に臆測は進展しなかった〉（二〇）とされる。

『黒い雨』の初めで、語り手は〈戦争中には軍の言論統制令で流言蜚語が禁じられ、回覧板組織その他で人の話の種も統制されている感があった〉（一）と述べていたが、戦時下において噂はまったくなかったわけではなく、ただ表立って語られないだけで燻っていたのである。先述したように、この作品には誤った噂や不確定な情報もしばしば示されるが、そうではない場合に〈流言蜚語〉という言葉が使われていることに注意すべきだろう。たとえば、シゲ子の「広島にて戦時下に於ける食生活」では、宮地さんの奥さんが教科書の改訂に文句を言ったことに対して、〈その筋〉からお叱りを受けた例が記されている。

しかし、かりそめにも国家の大方針のもとに編纂された国定教科書に関する問題でございます。其筋の人は奥さんに向かって、「流言蜚語は固く慎め。お前が闇の買出しに行った事実はわかっておる。そんな人間が、教科書のことに余計な容喙する資格はない。戦時下に於いて流言蜚語を放つ罪は、民法や刑法に牴触す

るばかりとは云われない」と云って、暗に国家総動員法に牴触すると云わんばかりであったそうでございます。もうそのころには、誰しも人前へ出たときには言葉に気をつけるようになっておりました。(四)

流言蜚語とは、一般的には「世間にひろがる根も葉もないうわさ。デマ」[17]という意味だが、ここで〈其筋の人〉は宮地さんの奥さんが根拠のないデマを言っているから咎めているのではない。それが本当かどうかとは関係なく、〈国家の大方針〉について意見を述べること自体を問題視しているのである。

そして重要なのは、そのような〈流言蜚語〉を言わせないようにしているのは〈其筋の人〉ばかりではない、ということだ。たとえば、上田九作という職員が〈大東亜共栄圏の理想を推進すると、戦争未亡人が殖えるばかりで、若い男が減って、物資が偏在するという弊害を生みますなあ〉と言うと、重松はわざわざその男を追いかけていって、〈そんな敗戦気分を出す噂は、伏せて置いてくれたまえ〉と注意する(九)。また、幼馴染のテイ子さんから旅館の客が〈アメリカ製の中戦車が、日本軍の中戦車を撃つと弾丸が貫通し、日本軍の戦車が撃った弾丸は敵戦車の塗料を落すだけ〉という話をしていたと聞くと、重松は〈これはもし本当のことだとしても歴然たる流言蜚語である〉(十五)と記すのだ。つまり、重松自身もまた、進んで〈流言蜚語〉を取り締まる側にまわっているのである。

黒古一夫は「この原爆文学の「名作」と言われる『黒い雨』の最大の問題点は、原爆(被爆)を〈被害〉の観点でしか描いていないことである」[18]と批判するが、この作品において広島の人々は全くの被害者として描かれているわけではない。重松は「被爆日記」の八月十三日に次のように書いている。

僕は正宗白鳥という小説家の随筆を思い出した。たしか三国同盟が成立したころ読売新聞に出ていたが、ニュース映画でヒトラーの演説しているところを見ると、虎が吠えているとしか思えないと書いていた。当時、ヒトラーのことを悪しざまに公言する人は珍しかった。ヒトラー・ユーゲントというのが来朝し、それ

をそっくり真似て青年隊を組織した県知事もいた。挙世滔々としてその風潮に向っている最中に、正宗さんという人は胸のすくようなことを書いてくれたと強い印象を受けた。その後、僕は軍需工場に入って増産ということに専念しているうちに、いつの間にかヒトラーが戦争に勝ってくれればいいと思うようになっていた。ところが広島が爆撃されてからは、手の平を返したように自分は矛盾だらけだったと思うようになった。それでも表むきは従来の通り国論に従っているような風をして、去る八月七日に高野広島県知事が県民に発した告諭文を清書して会社の玄関に掲示した。（十九）

ヒトラーのことを悪く書いた白鳥の文章に〈胸のすくようなことを書いてくれた〉と思ったというのだから、もともと重松は戦争には否定的だったのだと思われる。だが、軍需工場に入って仕事に励んでいるうちにそうした気持ちが変わっていき、広島に原爆が落ちてからは、また気持ちが変わったのだと言うのだ。ここで重松は、自身の気持ちが〈いつの間にか〉二転三転していたことに気付く。〈挙世滔々としてその風潮に向っている最中に〉それに抗う態度を保つことは難しい。矢須子の日記には、〈市役所の人や県庁の役人や警防団員に対して気をつかい、空襲警報のときには誰よりも早く飛び出して、「空襲、空襲」と呼び廻る〉松本さんという左翼学者の話が出てくる。重松はそれについて、〈松本さんが役人の前でちらちらするのは、今、世の中が狂っておるからだ。〔…〕しかし、とにかく男というものは、羽織を脱がんならんときには、思いきって脱がんならんのだ〉と言ったと矢須子は書いている。〈世の中〉で生きていく以上、自分の信条を変えることも仕方ない。重松はそう考えていたように思われる。

そのような大人たちに対して、〈挙世滔々としてその風潮に向っている最中に〉育った子供たちはもとより戦争に何の疑問も抱いていなかっただろう。戦争がこんなに悲惨なものだとは、少しも思いもしなかったことだろう。

こんな怖るべき爆弾がこの世にあろうとは、我々は話に聞いたこともなく、思ってもみたことがない。た

いていの人がそうであったろう。子供は正直だからその素振を見ればいい。被爆で殆ど全滅した勤労奉仕の中学生たちは、八月五日の日まで毎日のように家屋疎開の作業を手伝っていた。どの顔を見ても、ずらかったり逃げ隠れしたりするような色は見せていなかった。勤労奉仕の女学生たちは白鉢巻をして「学徒挺身隊」の腕章を巻き、往きも帰りも「動員学徒の歌」を合唱しながら団体行進で製鋼所へ通っていた。

君ハ銃トレ我ハ槌
戦ウ道ニ二ツナシ
国ノ大義ニ殉ズルハ
我等学徒ノ面目ゾ

製鋼所でこの女学生たちは、旋盤工として高射砲の玉を削っていた。二交替制で、遅い組は夜の十時まで削っていたそうだ。みんな今度のような爆弾が落ちて来るとは夢にも知らなかったろう。（十三）

〈戦ウ道ニ二ツナシ〉。小畠村の村長は青年団員を送る際に〈敵は謂わゆる新兵器を使いまして広島市の上空を襲い、広島在住の無辜の民を一瞬にして阿鼻叫喚の地獄に晒したということであります〉（一）と述べていたが、軍需工場に勤めていた重松は言うまでもなく、銃後の人々は間違いなく〈敵〉と戦っていたのであり、そうである以上〈無辜の民〉とは言われまい。八月六日、自身の上に原爆が落ちてくるまで、広島にいた大部分の人々は何の疑いもなく戦争に協力し、〈敵〉に勝つことを願っていたはずだ。

だが、八月六日以降、それが変わったのである。特に重松の思考はほとんど「戦後」と言っていいようなものへと急速に移行していく。そして、それは『重松日記』とはきわめて対照的だ。『重松日記』には、八月十四日の夜になかなか寝付けない様が描かれる。理由は明日の「重大放送」が気になるからで、いよいよ十五日になっても「重大放

送……重大放送……大切な放送……敗戦放送だろう。敗戦放送……たしかに重大だ。重要だ。重大重要に間違いない。有史以来の重大事だ」とそればかりが頭から離れないようだ。それに対して、『黒い雨』の重松はどうか。八月十四日の記述は工場長と会話をする場面で終わっており、十五日は〈昨日の疲れでぐっすり寝たせいか早く目がさめた〉という一文で始まっている。そして、〈重大放送〉によって泣いている工員たちを見て〈僕の目にも涙が込みあげてきた〉が、それは〈今月今日正午すぎの涙として正当派に属するもの〉ではなく、〈ほっとした瞬間の涙〉のようなものであったと言うのである。重松のそのようなズレが、戦時下において人々を〈敵〉と戦うように仕向けていたものに重松の目を向けさせていると言えるだろう。

では、それは何なのか。死体を片づけていた兵隊たちは〈わしらは、国家のない国に生まれたかったのう〉（十一）と呟くが、その〈国家〉なのだろうか。だが、重松は〈流言蜚語〉を自分たち自身が言わないようにしている理由として、〈広島が爆撃を受けてからは、いつ敵軍が上陸するか、いつ一億玉砕かと、びくびくしているのは工員たちも僕と同じことであるだろう。ただ人間の意志ががんじがらめに縛られて、不平はおろか不安な気持さえも口にするのを押し殺しているだけだ。組織というものがそうさせている〉（二十）と述べている。ここで言われる〈組織〉とは何か。

『黒い雨』において、軍隊はたとえば真空地帯のようなものとしては決して描かれていない。それは一つの完全な官僚機構である。作中では、軍人が規則に固執して重松たちの要請を断固として、或いはのらりくらりと拒否する場面が繰り返し描かれる。たとえば、重松は西部二部隊の国分中尉から預かっていた食料を紛失するのだが、〈西部二部隊は空襲で兵営ごと消えてなくなっていた〉ので仕方なく始末書を通信隊の経理部へと持っていく。だが経理部の軍人は〈こりゃあ困る。これはいかん〉と突き返し、〈その書類は、西部二部隊経理部の、国分中尉殿へ提出する書類じゃないですか。ここは通信隊の経理部です〉（十一）と頑として受け取ろうとしないのである。また、甲神部隊の罹災者

を引き取るために国民学校に行くと、そこの軍医は〈この収容所は、現在では国民学校じゃなくって、陸軍病院の分院です。今は、場合が場合であるため、兵隊と民間の負傷者を収容してありますが、患者の移送について地方人が容喙することは御遠慮願います。〔…〕くれぐれも云っておきますが、この収容所は陸軍の管轄に属します〉（十五）と言って、やはりにべもない態度を示すのである。

もちろん規則に厳しいのは軍人だけではない。たとえば、重松たちが死体の処分をどうするかに思い悩んだ際の場面を見てみよう。町役場は閉鎖状態で、医者はおらず、坊さんも檀家でせいいっぱいで、てんで相手になってくれない。

無論、非常時中の大非常時のこの際である。死亡診断書だの火葬届だの、とても間に合うものではない。この古市町と広島市では、戸籍その他について互に役所の管轄が違うので、平時でも手続をすませるまでには可なりの時間を食う。そうかと云って、死体を処分するのだから慎重を期さねばならぬ。我々が勝手なことは出来ないので、充分調査して来るように、工場長は庶務課の者を使いに出した。工場長は僕と似た年配だが、半官半民といった立場にあるせいか寧ろ普通の官吏よりもまだ規則に喧しい。（九）

このように重松たちは〈非常時中の大非常時〉の中においても、規則にしばられ、規則に追い立てられる。八月十五日の午前中に重松がしていることといえば、己斐駅に提出する必要書類を作成することなのだ。重松は仕事上必要な石炭の今後の輸送事情を調べてもらうことを己斐駅の駅長に依頼したのだが、工場長命令で〈後で誰に調査されてもわかるように〉するためにそれをわざわざ書類の形にしたのである。

僕は事務室から書類を食堂へ持って来て工場長に判を押してもらった。だが、敗戦となっては軍関係の被服工場の存続はあり得ない。己斐駅へは行くも行かないも無いのである。

「この書類は、どこへ保存しましょうか」と工場長に聞くと、

「僕が預かって、金庫に蔵って置く。では、確かに預かった」と云って食卓から立って行った。（二十）

このように見てきたとき、開高前掲書の「『黒い雨』には異常な人物が一人も登場しない。腐敗した軍人と官僚は痛烈にえぐられているが、その腐敗もまことに正常であって、異常はどこにもない」という指摘の正しさが理解されるだろう。それは、江藤の「異常時」における「平常心」という指摘と一見似ているようでいて全く違うものである。開高の言に付け加えるとすれば、「正常」に「腐敗」しているのは何も軍人や官僚に限られないということだろうか。また、そのような意味で「「黒い雨」が描き出した人間は、原爆によって変った人間ではなく、原爆によっても変わらない人間であった」[19]という徳永恂の指摘にも同意することが出来る。ただし、「変わらない人間」は『黒い雨』の中で必ずしも肯定されているわけではない、という留保つきで。

八月十三日に、重松は苦味丁幾から抽出したというアルコールで、工場長とひさしぶりの酒を飲む。

僕は桑の葉の天婦羅を肴にしながらアルコールの水割をコップに三ばい飲んだ。久しぶりの酒だから、酔うには酔ったがちっとも気勢があがらない。工場長は僕の倍くらい飲んで、飲めば飲むほど青ざめて被服支廠の笹竹中尉の従来の遣りくちをこきおろした。我々は工場の操業を円滑にして行くために、彼等に対して今までどんなに卑屈な態度をとっていたかお互に身にしみて知っている。人間の惨めさが、ありありと現れていて我ながらいやらしい。彼等にとって、我々は滑稽な木偶の坊に見えたろう。（十九）

〈彼等〉にさまざまな便宜を図っていたという〈我々〉もまた清廉潔白を主張することは出来ない。だから重松たちは〈人間の惨めさ〉を感じないわけにはいかないのである。

また、〈あのとき小母はんは、わしの見舞に来たのを忘れたか。わしのことを尊い犠牲者じゃと云うて、嘘泣きかどうかしらんが、小母はんは涙を流したのを忘れたか〉と庄吉さんに言われた池本屋の小母はんは〈そりゃあ庄吉やん、

あれは終戦日よりも前のことじゃったのやろ。誰だって戦時中は、そのくらいのことを云うたもんや〉（二）と言い返す。戦時中に被爆者を〈尊い犠牲〉だと言って泣くのが「正常」であるなら、広島の悲劇を〈みんなが忘れとる〉時代には同じ被爆者に向かって〈けっこうな御身分ですなあ〉と皮肉を言うのも実に「正常」であるに違いない。その精神構造は少しも変わってはいないのだ。

そして、庄吉さんが〈あのときの焦熱地獄――あれを忘れて、何がこのごろ、あの原爆記念の大会じゃ。あのお祭騒ぎが、わしゃあ情けない〉と憤ると、重松は〈おい庄吉さん、滅多なことを口にするな〉と言う。その所作は、戦時中において〈流言蜚語〉が口にされた時の所作と何と似ていることだろうか。村もまた、一つの〈組織〉に他ならないのだ。休養する必要があるが寝たきりでいるわけにもいかない小畠村の〈原爆病患者〉たちは、医者から散歩を勧められる。だが、〈この村では昔から散歩をする者などいた話を聞いたことがない。原則として散歩などということは有り得ないのだ。伝統的な風習の上から言ってそうである〉（二）という理由で散歩ではなく釣りをすることになる。村は村で、独特の規則があるのである。その意味では、禁忌とされる言動の中身は違っているものの、戦時下と戦後はまっすぐにつながっている。ここでも過去は過去として片づけることができないのだ。「変わるもの」と「変わらないもの」。戦争によって何が変わったのか。原爆によって何が変わったのか。戦時下において人々を〈敵〉と戦うように仕向けていたものから、果たして戦後の人々は自由になれているのだろうか。[20]

五、

井伏は『黒い雨』が野間文芸賞を受賞した際、「感想」（「群像」一九四七・一）として次のように述べている。

私は「黒い雨」で二人の人物の手記その他の記録を扱つたが、取材のとき被爆者の有様を話してくれる人

たちに共通してゐることは、初めのうちは原爆の話をしたがらないことであつた。もう一つ共通してゐることは、話してゐるうちに実感を蘇らせて来ると絶句してぐつと息をつまらせることであつた。思ひ出す阿鼻叫喚の光景に圧倒されるのだ。そのつど私は、ノートを取つてゐる自分を浅間しく思つた。

福間良明が適切に指摘するように、「井伏が執筆しながら実感していたのは、被爆体験の言語化不可能性であった」[21]と言ってよいだろう。容易に言語化することなど到底できないような「現実」。圧倒的な出来事。それを敢えて作品化するということが、しかも体験者でもない者に果たして可能なのだろうか。その困難な課題を遂行するため『黒い雨』が採用したのは、それに「書かれたもの」という衣をかぶせるという方法であった。そこでは現前化の生々しさは回避される。時間的にも場所的にも距離が生まれ、そこでは「現実」をそのまま再現するという不可能な試みは初めから目指されてはいないのだ。ただし、重松の「被爆日記」自体が〈枝葉から枝葉へ〉と広がる断片の集合という性質を持っているのに加えて、「広島に於ける戦時下の食生活」、それに「岩竹博の手記」などが加わり、『黒い雨』は「現実」をさまざまな角度から描き出した断片の集合体としての趣を呈してくる。だが、それらは決して全体を形成することはない。一九四五年八月の広島の「現実」は、決して完全には再現され得ないものとして、ここでは提示されているのだ。[22]

だが、それだけであるならば、敢えて原爆を取り上げる必要はないだろう。単に「書かれたもの」として読み捨てられるだけなのであれば、原爆を作品化する意味などどこにもないに違いない。『黒い雨』は、矢須子の発症という事件を作品内に発生させることで、作品内における「書かれたもの」と「現実」との境目を一瞬消失させる。以降、「書かれたもの」は「書かれたもの」として留まってはいられなくなる。そしてそれは『黒い雨』の作品外にいる読者にも影響を与えないわけにはいかないのである。

重松は矢須子の発症がわかってからも「被爆日記」の清書を続けていく。暦を見て、重松はあと三日で八月六日だということに気付き、こう呟く。〈そうだ、あと三日だ。筆記を急がねばならぬ〉。当初の目的は既に失ってしまったはずだ。しかも、八月六日までに書かなければならない理由などどこにもない。では、なぜ書くのか。書き続けるのか。重松を「書くこと」へと駆り立てている何かがあるはずなのだが、『黒い雨』は決してそれを説明しようとはしない。自身の〈ヒストリー〉を残すためだとか、一九四五年八月の出来事の忘却に抗うためだとか、そのような説明では決して足りない過剰さがその何かには孕まれている。そして、「書かれたもの」を「書かれたもの」としては読めなくなってしまった読者にとって、その何かは適当に遣り過ごすことが出来るようなものではなくなってしまっているのではないだろうか。

「被爆日記」の清書が終わったあと、重松は〈今、もし、向こうの山に虹が出たら奇蹟が起る。白い虹でなくて、五彩の虹が出たら矢須子の病気が治るんだ〉と祈りの言葉を述べる。たとえその可能性が限りなく少ないとしても、矢須子が岩竹さんのような奇跡的な回復を遂げることも全く無いわけではないのであり、作品の結末は読者に向かって開かれているのだ。『黒い雨』には、さまざまな「書かれたもの」とそれを読む者が繰り返し示される。だが、重松の「被爆日記」を読む者だけは決して登場しない。おそらくそれは、読者の役割なのだろう。重松の〈ヒストリー〉を、そして『黒い雨』という作品をどのように受け止めるか。それは「書くこと」そして「書かれたもの」をめぐって展開されるこの「緻密な名作」（開高健）を読んでしまった私たちの責任に他ならないのである。

注

（1）この時期、他に松本清張『昭和史発掘』（文藝春秋、一九六五〜七二）、阿川弘之『山本五十六』（新潮社、一九六五・一一）、吉村昭『戦艦武蔵』（新潮社、一九六六・九）などが刊行されていたこともあり、「記録文学」「実録文学」が注目を集めていた。

（2）ただし、その場合には丹羽文雄らの「風俗小説」とは違う意味での「風俗小説」であることが断わられている。佐伯彰一は「創作合評」（「群像」一九六六・一〇）で、『黒い雨』は「オースチン的な意味での「風俗小説」といえるんじゃないか。〔…〕風俗のレベルで原爆という化け物をつかまえて、しかもそれがこれほどの厚みと実質にわたり得ているというのは驚くべき達成ですね」と称賛する。また、寺田透「『黒い雨』」（「世界」一九六七・七）は批判的な観点から「広島とその近郊における核兵器のもたらした惨禍が、風俗と化している」と指摘するが、「もっともここに言う風俗は、普通風俗小説というときの風俗とは違う」と述べている。

（3）川口隆行「「原爆文学」という問題領域――「夏の花」「黒い雨」の聖典化、あるいは『原爆文学史』」（「プロブレマティーク　文学／教育」二号、二〇〇一・二→『原爆文学という問題領域』創言社、二〇〇八・四）

（4）長岡弘芳『原爆文学史』（風媒社、一九七三・六）

（5）開高健『紙の中の戦争』（文藝春秋、一九七二・三）

（6）「火焔の日――死線上の彷徨」、「被爆の記」、「続・被爆の記」の三種があり、それらはまとめて重松静馬『重松日記』（筑摩書房、二〇〇一・五）として刊行されている。いずれも当時のメモをもとに戦後数年経ってから執筆されたものであり、日記というより日記形式の手記と言ったほうが正確だろう。『黒い雨』の主人公の名前である閑間重松は、重松静馬の名前を反対にして付けられた。

（7）豊田清史『「黒い雨」と「重松日記」』（風媒社、一九九三・八）、同『知られざる井伏鱒二』（蒼洋社、一九九六・七）などを参照。豊田は「井伏鱒二の『黒い雨』は盗作だったのか」（「週刊金曜日」一九九五・一二・一五）でも同様の主張を行ったが、それについて相馬正一は「読者に「黒い雨」がいかにも「重松日記」の盗作であるかのような印象を与えた」と述べ、豊田が「重松日記」の本文を改竄し、『黒い雨』の本文に近づけるという操作を行っていることを批判している（「「黒い雨」盗作説への反論」、「東京新聞」一九九七・八・六〜七）。ただし、豊田自身が「盗作」という言葉を使ったことはない。何故なら、重松が『黒い雨』に自身の日記を使用することを許諾していた以上「盗作」と主張するのが無理であることは豊田もよくわかっていたからだ。豊田は「「盗作だったのか」はまったく「週刊金曜日」が一方的に

つけた題名である」と説明している（『黒い雨』をめぐって　相馬正一氏への反論」、「東京新聞」一九九七・九・二）。豊田の主張に依拠した猪瀬直樹『ピカレスク』（小学館、二〇〇〇・一〇）が『黒い雨』の価値を全否定したことで、この問題は広く知られるようになった。

(8) 栗原裕一郎『〈盗作〉の文学史』（新曜社、二〇〇八・六）を参照。

(9) 「井伏鱒二『黒い雨』の真実――全体の9割以上が引用だった！」（「週刊金曜日」二〇〇二・四・五）

(10) 川村湊『風を読む水に書く――マイノリティー文学論』（講談社、二〇〇〇・五）は、豊田が「本当に擁護しているのは、『黒い雨』に「使われた」数多くの「原爆体験」記録なのであり、彼はそれが『黒い雨』の中で、縦横に、見事なまでに〝元の形をとどめず〟作品の世界に奉仕させられたことを、ひょっとしたら「恨み」に思っていると考えられる」と指摘し、「無数の、無名の筆者たちによる、それこそ命と引き替えにした被爆体験の「文章」。それが、どんなに偉い文学者であろうと、自分の作品世界を作り上げるために、ズタズタにしたり、イイトコ取りをしたり、引用や使用の断り書きをせずに使っていいはずはない」と豊田の心情を「忖度」している。体験者が書き遺した多くの原爆文学が無視黙殺されていく中で、非体験者が書いた『黒い雨』のみが高く評価され、ベストセラーとなったことに対して、複雑な思いを抱いた被爆者は少なくなかったようだ。

(11) 日高昭二「『黒い雨』研究」（『「国文学解釈と鑑賞」別冊　井伏鱒二の風貌姿勢』至文堂、一九九八・二）

(12) 長谷川三千子『からごころ――日本精神の逆説』（中央公論社、一九八六・六）

(13) 榊敦子『行為としての小説――ナラトロジーを超えて』（新曜社、一九九六・六）

(14) 松本鶴雄『井伏鱒二論』（冬樹社、一九七八・五）、湧田佑『私注・井伏鱒二』（明治書院、一九八一・一）などを参照。

(15) 大江健三郎「揺るがぬ「黒い雨」」（「新潮」一九九三・九）

(16) 寺横武夫「「黒い雨」注解」（『井伏鱒二研究』渓水社、一九八四・七）

(17) 『日本国語大辞典　第二版』一三巻（小学館、二〇〇二・一）

(18) 黒古一夫『原爆文学論』（彩流社、一九九三・七）

(19) 徳永恂「黒・水中世界・自然のナルシシズム――井伏鱒二論」（「人間として」一九七二・一二）

(20) ジョン・W・トリート『グラウンド・ゼロを書く――日本文学と原爆』（法政大学出版局、二〇一〇・七）は、『黒い雨』は「「文化」と「自然」を循環させ、両者を同義語にする」という意味で「イデオロギー装置の一部」であるが、「小畠村の世界は、実際にそこで暮らす

かもしれない世界だとしても、私たちが自分自身のためにはっきりと望む世界ではない」以上、「『黒い雨』のイデオロギー的な内容は完全に有効であるとはとても言えない」と指摘している。

(21) 福間良明『〈反戦〉のメディア史』（世界思想社、二〇〇六・五）

(22) 成田龍一は「屹立するような出来事があった場合、出来事そのものを直接に描写することは不可能であること、そして出来事は誰に向かってどう伝えるかによって相貌を現し、それゆえに幾重にも書き換えられるのだということを、井伏鱒二は『黒い雨』で示している」（『戦争はどのように語られてきたか』（朝日新聞社、一九九九・八）での発言）と指摘している。

※　本文の引用は『井伏鱒二全集』（筑摩書房、一九九六～二〇〇〇）に拠る。

『黒い雨』　『重松日記』との対照表　※1

章	内容	全集　※2	文庫　※3	『重松日記』　※4
1	矢須子の日記、等	255頁1行目～268頁12行目	5頁1行目～25頁6行目	なし
2		268頁13行目～270頁3行目	25頁7行目～27頁11行目	なし
		270頁3～4行目	27頁12～13行目	③207頁7～8行目
	矢須子の日記、等	270頁5行目～278頁10行目	27頁14行目～40頁6行目	なし
	被爆日記（八月六日）	278頁11～17行目	40頁7～14行目	①6頁3～13行目
	被爆日記	278頁18行目～280頁15行目	40頁15行目～43頁15行目	①11頁13行目～14頁3行目
3		280頁16行目～284頁4行目	44頁1行目～49頁3行目	なし
	被爆日記	284頁5～6行目	49頁4～5行目	①13頁14～15行目
	被爆日記	284頁7行目～289頁7行目	49頁6行目～56頁13行目	①14頁4行目～17頁4行目
	被爆日記	289頁8～19行目	56頁14行目～57頁12行目	なし
	被爆日記	289頁20行目～290頁6行目	57頁13行目～58頁9行目	①17頁5～10行目
	被爆日記	290頁7行目～291頁14行目	58頁10行目～60頁5行目	なし
	被爆日記	291頁15行目～292頁11行目	60頁6行目～61頁11行目	①17頁11行目～18頁14行目
	被爆日記	292頁12行目～293頁3行目	61頁12行目～62頁9行目	なし
	被爆日記	293頁4行目～294頁5行目	62頁10行目～64頁4行目	①18頁14行目～19頁12行目
	被爆日記	294頁6行目～295頁8行目	64頁5行目～65頁16行目	なし
	被爆日記	295頁9行目～298頁18行目	66頁1行目～70頁16行目	①19頁12行目～22頁3行目
4	広島にて戦時下に於ける食生活、等	299頁1行目～310頁6行目	71頁1行目～87頁15行目	なし
5		310頁7行目～313頁18行目	88頁1行目～93頁4行目	なし
	被爆日記	313頁19行目～316頁6行目	93頁5行目～97頁1行目	①22頁4行目～24頁17行目
	被爆日記	316頁7行目～318頁1行目	97頁2行目～99頁11行目	なし
	被爆日記	318頁2行目～320頁2行目	99頁12行目～102頁13行目	①25頁1行目～27頁5行目
	被爆日記	320頁3行目～322頁1行目	102頁14行目～105頁14行目	①29頁10行目～31頁10行目
	被爆日記	322頁1～2行目	105頁14～15行目	②164頁16行目～165頁2行目
6		322頁3～17行目	106頁1行目～107頁4行目	なし
	被爆日記	323頁1行目～326頁4行目	107頁5行目～112頁3行目	①31頁11行目～33頁11行目
	被爆日記	326頁5～14行目	112頁4～16行目	なし
	被爆日記	326頁15～18行目	113頁1～7行目	①33頁12～14行目
	被爆日記	326頁18行目～327頁17行目	113頁7行目～114頁13行目	なし
	被爆日記	327頁18行目～328頁3行目	114頁14行目～115頁5行目	①33頁14行目～34頁1行目
	被爆日記	328頁3行目～330頁16行目	115頁5行目～119頁4行目	なし
	被爆日記	330頁16～18行目	119頁4～7行目	①34頁2～4行目
	被爆日記	330頁19行目～331頁17行目	119頁8行目～120頁13行目	なし
	被爆日記	331頁18行目～335頁19行目	120頁14行目～126頁16行目	①34頁5行目～40頁4行目
7		336頁1～6行目	127頁1～7行目	なし
	被爆日記	336頁7行目～337頁5行目	127頁8～128頁14行目	①40頁5～12行目
	被爆日記	337頁6行目～338頁6行目	128頁15行目～130頁7行目	なし
	被爆日記	338頁7行目～339頁20行目	130頁8行目～132頁14行目	①40頁13行目～42頁15行目
	被爆日記	340頁1～20行目	132頁15行目～134頁7行目	なし
	被爆日記	341頁1行目～347頁16行目	134頁8行目～144頁12行目	①42頁16行目～48頁13行目
8	被爆日記	347頁17行目～350頁4行目	144頁13行目～148頁3行目	なし
	被爆日記	350頁5行目～351頁9行目	148頁4行目～150頁2行目	③203頁14行目～205頁7行目
	被爆日記	351頁10～18行目	150頁3～12行目	なし
	被爆日記	351頁19行目～352頁12行目	150頁13行目～151頁13行目	②123頁1～14行目
	被爆日記	352頁13行目～355頁10行目	151頁14行目～156頁9行目	なし
	被爆日記	355頁11行目～356頁2行目	156頁10行目～157頁5行目	③202頁9行目～203頁12行目
	被爆日記	356頁3～11行目	157頁6行目～158頁2行目	①48頁14行目～49頁10行目
	被爆日記	356頁11行目～357頁1行目	158頁2～14行目	①50頁9行目～52頁5行目
9		357頁2～14行目	159頁1行目～160頁3行目	なし

9	被爆日記（八月七日）	357頁15行目～359頁1行目	160頁4行目～162頁4行目	①57頁8行目～58頁12行目 ②91頁1行目～92頁7行目
	被爆日記	359頁1～13行目	162頁4行目～163頁1行目	なし
	被爆日記	359頁14～17行目	163頁2～9行目	①58頁14行目～59頁2行目 ②92頁7～13行目
	被爆日記	359頁18行目～360頁7行目	163頁9行目～164頁2行目	なし
	被爆日記	360頁8行目～362頁13行目	164頁3行目～167頁9行目	①59頁3～16行目 ②92頁14行目～93頁15行目
	被爆日記	362頁14行目～364頁7行目	167頁10行目～170頁5行目	なし
	被爆日記	364頁8行目～366頁5行目	170頁6行目～172頁12行目	①60頁15行目～62頁12行目 ②94頁14行目～96頁9行目
	被爆日記（八月八日）	366頁6行目～368頁9行目	172頁13行目～175頁16行目	①63頁1行目～65頁4行目 ②97頁3行目～99頁10行目
10		368頁10～11行目	176頁1～2行目	なし
	被爆日記	368頁12行目～371頁17行目	176頁3～181頁5行目	なし
	被爆日記	371頁18行目～374頁12行目	181頁6行目～185頁10行目	①66頁12行目～69頁14行目 ②101頁6行目～104頁7行目
	被爆日記（八月九日）	374頁13行目～377頁10行目	185頁11行目～189頁13行目	①69頁15行目～71頁10行目 ②104頁8行目～106頁14行目
11		377頁11～12行目	190頁1～2行目	なし
	被爆日記	377頁13行目～380頁4行目	190頁3行目～193頁16行目	なし
	被爆日記	380頁5～6行目	194頁1～3行目	①72頁7行目 ②107頁11～13行目
	被爆日記	380頁7行目～381頁6行目	194頁4行目～195頁11行目	なし
	被爆日記	381頁7～16行目	195頁12行目～196頁9行目	③211頁8行目～212頁5行目
	被爆日記	381頁17行目～384頁11行目	196頁10行目～200頁9行目	なし
	被爆日記（八月十日）	384頁12行目～385頁5行目	200頁10行目～201頁9行目	なし
	被爆日記	385頁6～8行目	201頁10～12行目	①76頁4～5行目 ②114頁1～3行目
	被爆日記	385頁8～17行目	201頁12行目～202頁7行目	なし
	被爆日記	385頁18行目～386頁2行目	202頁8～14行目	①75頁1～4行目 ②112頁1～5行目
	被爆日記	386頁3～18行目	202頁15行目～204頁1行目	①76頁10行目～77頁4行目 ②114頁11行目～115頁3行目
	被爆日記	386頁19行目～387頁10行目	204頁2行目～205頁1行目	なし
	被爆日記	387頁11～12行目	205頁2～3行目	②165頁3～4行目
	被爆日記	387頁13～15行目	205頁4～6行目	①75頁5～7行目 ②112頁6～9行目
	被爆日記	387頁16行目～388頁6行目	205頁7行目～206頁4行目	①77頁5～14行目 ②115頁4～13行目
	被爆日記	388頁6～18行目	206頁4行目～207頁1行目	なし
12	被爆日記	389頁1～12行目	207頁2行目～208頁1行目	なし
	被爆日記	389頁13行目～392頁9行目	208頁2行目～212頁2行目	②132頁13行目～134頁16行目
	被爆日記	392頁10行目～393頁11行目	212頁3行目～213頁14行目	なし
	被爆日記	393頁12行目～396頁2行目	213頁15行目～217頁12行目	②141頁12行目～143頁5行目
	被爆日記	396頁3行目～397頁12行目	217頁13行目～220頁3行目	なし
	被爆日記	397頁13～20行目	220頁4～13行目	②143頁14行目～144頁4行目
	被爆日記	398頁1～15行目	220頁14行目～221頁14行目	①80頁8～17行目 ②119頁11～14行目
	被爆日記	398頁16行目～400頁9行目	221頁15行目～224頁8行目	なし
	被爆日記	400頁10行目～401頁3行目	224頁9行目～225頁8行目	②144頁5～13行目
13	被爆日記（八月十一日）	401頁4～13行目	225頁9行目～226頁5行目	なし

13	被爆日記	401頁14行目～402頁5行目	226頁6～16行目	②137頁1～16行目
	被爆日記	402頁6行目～404頁16行目	227頁1行目～230頁12行目	なし
	被爆日記	404頁17行目～407頁7行目	230頁13行目～234頁10行目	②144頁14行目～146頁8行目
	被爆日記	407頁7行目～408頁10行目	234頁10行目～236頁6行目	なし
	被爆日記	408頁11行目～410頁11行目	236頁7行目～239頁12行目	②146頁9行目～151頁4行目
	被爆日記	410頁12行目～411頁4行目	239頁13行目～240頁6行目	なし
	被爆日記	411頁5行目～412頁5行目	240頁7行目～241頁16行目	②140頁14行目～141頁11行目
	被爆日記	412頁6～15行目	242頁1～10行目	②122頁11～14行目
	被爆日記	412頁16行目～413頁8行目	242頁11行目～243頁10行目	②138頁1～11行目
	被爆日記	413頁9行目～414頁10行目	243頁11行目～245頁4行目	②135頁14行目～136頁8行目
	被爆日記	414頁10行目～415頁14行目	245頁4行目～247頁2行目	なし
14	被爆日記	415頁15行目～424頁20行目	247頁3行目～261頁1行目	なし
15	被爆日記（八月十二日）	425頁1行目～437頁15行目	262頁2行目～279頁15行目	なし
16	高丸矢須子病状日記、等	437頁16行目～450頁3行目	280頁1行目～298頁13行目	なし
17		450頁4行目～453頁4行目	298頁14行目～303頁3行目	なし
	岩竹博の手記	453頁5行目～461頁14行目	303頁4行目～316頁4行目	④222頁上16行目～244頁上2行目
18	岩竹博の手記	461頁15行目～466頁20行目	316頁5行目～324頁7行目	④244頁上3行目～247頁下1行目
	岩竹さんの奥さんの回想	467頁1行目～470頁14行目	324頁8行目～330頁2行目	なし
	岩竹さんの奥さんの回想	470頁15行目～472頁17行目	330頁3行目～333頁8行目	④247頁下2行目～249頁下11行目
	岩竹さんの奥さんの回想	472頁18行目～477頁9行目	333頁9行目～340頁10行目	なし
19		477頁10行目～478頁2行目	340頁11行目～341頁10行目	なし
	岩竹博の手記	478頁3行目～480頁1行目	341頁11行目～344頁8行目	④249頁下12行目～252頁上8行目
		480頁2行目～482頁16行目	344頁9行目～348頁8行目	なし
	被爆日記（八月十三日）	482頁17行目～490頁6行目	348頁9行目～359頁13行目	なし
	被爆日記	490頁7～13行目	359頁14行目～360頁7行目	③191頁7～14行目
	被爆日記	490頁14行目～492頁18行目	360頁8行目～363頁12行目	なし
20	被爆日記（八月十四日）	493頁1～17行目	363頁13行目～365頁6行目	なし
	被爆日記	493頁18行目～494頁15行目	365頁7行目～366頁9行目	③173頁11行目～174頁17行目、177頁5～9行目
	被爆日記	494頁16行目～495頁6行目	366頁10行目～367頁8行目	なし
	被爆日記	495頁7～8行目	367頁9～11行目	③176頁15行目～177頁4行目
	被爆日記	495頁9～19行目	367頁12行目～368頁9行目	なし
	被爆日記	495頁20行目～497頁1行目	368頁10行目～370頁4行目	③177頁10～16行目
	被爆日記	497頁2～11行目	370頁5行目～371頁2行目	なし
	被爆日記	497頁12行目～498頁12行目	371頁3行目～372頁12行目	③183頁3行目～184頁13行目
	被爆日記	498頁13行目～499頁20行目	372頁13行目～374頁14行目	なし
	被爆日記（八月十五日）	500頁1～13行目	374頁15行目～375頁14行目	なし
	被爆日記	500頁14～20行目	375頁15行目～376頁5行目	③191頁15行目～192頁6行目
	被爆日記	500頁20行目～501頁9行目	376頁5～16行目	③205頁9行目～206頁12行目
	被爆日記	501頁10～17行目	377頁1～10行目	なし
	被爆日記	501頁18行目～503頁13行目	377頁11行目～380頁7行目	③198頁13行目～200頁5行目
	被爆日記	503頁13行目～504頁5行目	380頁7行目～381頁5行目	なし
	被爆日記	504頁6行目～505頁3行目	381頁6行目～382頁11行目	③200頁6行目～201頁7行目

20	被爆日記	505頁4～20行目	382頁12行目～384頁1行目	なし
		506頁1～8行目	384頁2～10行目	なし

※1　正確を期そうとすると繁雑になり過ぎるので、おおよその対応を示すことにした。この表はあくまでも目安と考えていただきたい。
※2　頁数は『井伏鱒二全集』第23巻（筑摩書房、1998年12月）のものを使用した。
※3　頁数は『黒い雨』（新潮文庫、73刷、2011年4月）のものを使用した。
※4　『重松日記』には重松静馬が執筆した①「火焔の日―死線上の彷徨」、②「被爆の記」、③「続・被爆の記」の他に、岩竹博が執筆した④「広島被爆軍医予備員の記録」がおさめられている。それぞれ番号で表記した。

（日本語日本文学科　助教）